研究プロジェクト

モノと感覚・価値に関する基盤研究

大西宏志（京都造形芸術大学准教授）

■「モノ」の向こう側にあるニュアンス

私たち日本人が「モノ」と言ったときには、「もののけ」、「もののあはれ」、「ものがたり」というように、その「モノ」の向こう側に、何かの存在、他者とのつながりといった、物質以上のニュアンスを感じ取ることができる。2006年度～2009年度、京都大学こころの未来研究センター鎌田東二教授によって、「モノ学の構築――もののあはれから貫流する日本文明のモノ的創造力と感覚価値を検証する」をテーマとする研究会（モノ学・感覚価値研究会）が発足、運営され、宗教学、美学、比較文化論、認知科学、そして芸術の実践など、領域を越えた活動が行われた。2010年度、本研究プロジェクトでは、この研究会の流れを汲みながら、人間がモノから何かを感じるという性質が何によって実現されているのか、「言葉」という視点から議論を行う研究会と、モノをテーマにした展覧会「物気色」およびシンポジウムを実施した。

■シンポジウム「言葉の感覚・価値――その韻律、質感、視点から」

研究会の主要な発表としては、2010年11月26日「言葉の感覚・価値――その韻律、質感、視点から」と題するシンポジウムを京都大学こころの未来研究センターで行った。本シンポジウムでは、モノのカテゴリ化やその価値の感覚と深く関連する「言葉」をテーマとし、「モノを作る立場」の作家（詩人）と「人間を分析する立場」の感覚や言語の研究者が、人間のモノに対する認識や、感覚・価値における言葉の役割を分野横断的に議論した。具体的には、松井茂氏（東京藝術大学、詩人）には「口ずさめる詩とは何か――声を共有する試み」と題し、意味を明示的には持たない言葉によって書かれた詩、およびその詩を発声することで生じる個人個人の身体感覚とその記号接地に関する試みについて、また、渡邊淳司研究員（日本学術振興会／NTTコミュニケーション科学基礎研究所）には「オノマトペを利用した触り心地の分類」と題し、触覚のオノマトペとその音声の関係を利用したワークショップについて紹介いただいた。そして、高嶋由布子氏（京都市立芸術大学、認知言語学）には「五感を捉えることばの視点」と題し、五感の知覚動詞の持つ視点の身体性や主観との関連について、鈴木清重氏（立教大学、知覚心理学）には「事象の知覚体制化と映像表現の技法」という題目で、言説や画像系列の組み合わせによって生じる印象の変化について講演いただいた。本シンポジウムによって、言葉が持つ発声の音響的な作用や、視点の操作に関する新たな視座がもたらされた。

■展覧会「物気色」

展覧会「物気色」では、京都市内にある築120年の日本家屋（京都家庭女学院・虚白院）を会場にして18名の作家が作品を展示。これまで現代美術が扱ってこなかったモノや気配の現出が試みられた。また、鎌田東二教授と河村博重能楽師による能舞「虹鬼伝説」も実施し、日本の古典芸能が持つ生態智を今日的な形で提示した。さらに、こころ観＋ワザ学合同研究会として「民藝と物気色アート」と題したシンポジウムを、志村ふくみ氏（染織家、人間国宝）、鞍田崇氏（総合地球環境学研究所）、近藤高弘研究員（造形作家）、武田好史氏（アートプロデュース）、大西宏志研究員（京都造形芸術大学、映像）らによって実施した。志村氏の基調講演では、無我・無名を重視する民藝運動と既に身についてしまった近代的な自我との葛藤が語られ、続くシンポジウムでは自我の現れとしての近代芸術を乗り越えるものとして、物気色のアートの可能性について討議された。

これらの成果は、新たな研究・実践分野の萌芽となるとともに、既存の研究・実践をより広い視点から相対化することに繋がる。

能舞「虹鬼伝説」シテ：河村博童、音楽：鎌田東二（撮影：佐藤鷹政）

研究プロジェクト

ミクロ文化事象分析と映像実践を通じたこころの学際的研究

宮坂敬造（慶應義塾大学教授）

■〈こころを写す映像記録〉

本研究では、〈こころを写す映像資料〉および〈精神生態関与資料〉の分析理論を展開しつつ、「相互作用自然事態に現れる〈こころ〉の表現・認知過程把握の手だてとなる、新しい映像手法」の開拓・呈示を目的とした。心的状態に関わる表情、身体所作、言行を映像記録していく場合には、他者との相互作用場面の背景環境に照らしながら映像に定着する作業がまず必要となる。この認識に基づき、本研究では〈こころを写す映像記録〉という新しい概念を設け、こころ研究に役立つ映像系列がもつべき特色を明らかにし、また、そうした学術映像記録の作成条件を検討し、将来行う予定の映像記録制作に役立つ方途としたい。

■内部研究会とシンポジウム

そのような映像記録は、ひとまとまりのこころの相互過程、すなわち精神生態単位を最小限一単位含むような映像系列（G・ベイトソンの先行研究を援用拡張）からなっているべきものである。このように考える本研究では、そうした映像系列が組み合わさって感情変化を伴う認知的転位が生じる心的事態に特に注目し、これを「ミクロ文化事象分析」の手法（R・バードウィセルおよびA・シェフレンの先行研究を改訂）と組み合わせて捉える分析方法の開拓を試みた。与えられた予算枠のなかで計２回の内部研究会によってこうした方法論的議論の展開を試み、呪術による病の治療儀礼の調査映像等から怒りや嫉妬等の〈負の感情〉の展開経緯を捉える映像系列事例と参照して検討する方途を討論した。あと２回は、本センター鎌田東二教授主催の「負の感情研究――怨霊から嫉妬まで」との合同開催の機会に恵まれて、シンポジウム形式での研究発表を行った。特に、本連携研究代表者が所属する慶大人文グローバルCOE文化人類学班関連の研究会とも呼応し、映像人類学の重鎮であるサウス・カロライナ大学名誉教授カール・ハイダー氏、およびカナダ・トロント大学のジェラルド・カプチック教授の研究発表が本連携研究共催で得られた点で、当初志向した国際レベルでの研究発表にはずみがついた結果となった。

■文化と医療誌に関わる映像

以上が簡略な概要であるが、以下で紙幅の範囲で説明してゆく。

本連携研究で扱う映像記録の内容は、文化と医療誌に関わる映像、すなわち、宗教―医療的場面での憑依の映像記録等の、情意・エトスを表現する映像記録となる。準備的予備研究を前年度に違う題名で実施したが、そこでは、「こころを写す映像記録・表現」の標本抽出的な例となる製作済みの映像記録作品を学術的なものを主として選定、検討評価した（京大関係の蒐集所蔵品も参照し、ロンドンRoyal Anthropological Instituteとドイツ・ゲッティンゲンのIWF研究所所蔵の映像資料等を検討〈宮坂担当〉、ドイツ・Max Plank研究所の動物行動学的映像記録〈大石担当〉）。すなわち、それらの映像資料を、こころを写す系列単位を同定しながら本研究の分析作業枠組みによって分析・検討し、さらに、喜怒哀楽等の生活感情や宗教的憑依等の変性意識や精神症状に関連したこころの状態などを、それがどのような社会的文化的文脈で記録・表現されているのか（たとえば映像人類学での特定の社会でのジェンダー関係の文脈、精神医学的調査や臨床場面での治療者患者関係、トラウマ等の記憶、教育場面における教師生徒関係など）、その関連に留意して分析整理した。

■〈こころにまつわる精神生態〉

こうした整理をふまえ、本年度は、客観的なこころの状態として映像記録者に捉えられた対象者たちの心的状態を、その所作や行動を通して記録者が映像記録表現する過程を分析する枠組みをさらに精緻化していく作業を進めた。また、映像記録表現者が属する職能集団で伝えられる映像記録表現技法や所与の映像記録機器や技術の変化、現場のわざの運用形態が、その集団や時代・文化によって遷移していく経過にも着目し、「こころを写す映像記録技法」の変遷とそうした映像記録の特色について、50年代から70年代にかけての一部の範囲ではあるが、分析・検討を試みた。

検討の際、ひとつの映像記録作品には複数の系列単位で示される水準とそれらが関連して全体としてあつかうこころの状態という水準がある、という点から出発し、当初は、イメージのインパクトと物語系列から映像系列を捉える認知科学的接近の知見に照らしつつ、ナラティヴの理論も参照しながら分析枠組みを整えていった。その過程で、ミクロ文化事象の概念を改訂導入し、〈こころにまつわる精神生態〉という、より深い単位で考察する枠組みを改訂して組み込むことにより、こころを写す映像資料・こころ誌映像資料の的確な把握と分析が可能になる展望をもつに至った。

以上の方法を用いて、アフリカ・カメルーン東部州農耕民の呪術事例（大石・山口担当）、南インドのブータ祭祀とガーナ・アカン族儀礼での憑依事例（石井担当）の映像系列を分析し、冒頭記述のシンポ等での発表に反映させた。

研究プロジェクト

近代技術的環境における心性の変容の図像解釈学的研究

秋丸知貴（日本美術新聞社編集局長）

■図像解釈学とは何か？

一般に、生物は、それぞれ種に固有の感受器官と反応器官が構成する、固定的な「環境世界」（ヤーコプ・フォン・ユクスキュル）に閉じ込められている。これに対し、本能が壊れた「欠陥生物」（アーノルト・ゲーレン）である人間は、環境「世界内存在」（マルティン・ハイデッガー）であると共に、環境「世界開放性」（マックス・シェーラー）も有している。

エルンスト・カッシーラーは、この世界開放性の鍵を「象徴形式」と見る。つまり、人間は、感受系と反応系の間に象徴系を介在させ、「対象の身替」ではなく「対象の概念のための乗物」（スザンヌ・ランガー）として、抽象的・精神的内容を具体的・感性的形式で表現する、象徴形式を能動的に形成することにより、自然から自由になると同時に自然を制御する。

そして、この象徴形式の中でも、言語的「イデア」に先行する、図像的「イコン」（ハーバート・リード）としての造形芸術、特に絵画こそは、最初に外界と内面を調節し、感情と思考を調整し、認識と行為を調律し、環境への適応を可能にする、人間文化の最も基礎的で根源的な象徴形式である。

これを受けて、同一の文化圏におけるさまざまな文化事象との照合を通じて、可視的な具現的・感性的記号の造形と画題に、それを創出した時代・社会に通底する不可視的な心性的・精神的意味内容を解読する美学・美術史学方法論が、エルヴィン・パノフスキーが開拓した「図像解釈学（イコノロジー）」である。

■近代技術的環境における心性の変容――アウラの凋落

本研究プロジェクトは、この図像解釈学を近代西洋美術に適用し、その本質的特性である抽象化傾向に、近代技術的環境における心性の変容の反映を考察する。

まず、ヴァルター・ベンヤミンの「アウラ」は、原著に即して分析すれば、同一の時間・空間上に共存する主体と客体の相互作用により相互に生じる変化、及び相互に宿るその時間的全蓄積と読解できる。また、そうしたアウラを典型的に生み出す、主体が客体と同一の時空間上で原物的・直接的・集中的・五感的に相互作用する関係を「アウラ的関係」、その場合の主体の客体に対する知覚を「アウラ的知覚」と定義できる。

基本的に、生来的身体と天然的自然に基づく「自然的環境」（ジョルジュ・フリードマン）では、技術は肉体の連続的延長であり、動力は天然自然力に依存しているため、人間は環境に物理的に内包され織り込まれていた。したがって一般的に、自然的環境では、人間と外界の関係は密接的で沈潜的なアウラ的関係であり、その知覚は持続的で充実的なアウラ的知覚であった。

そして、このアウラ的知覚を必須的前提として発達したのが、前近代西洋美術の主流的特徴である、自然主義的なルネサンス的リアリズムである。なぜならば、その特質である緻密で具象的な再現描写には、対象との濃密で没入的な「感情移入」（ヴィルヘルム・ヴォリンガー）的相互関与が経験上不可欠だからである。

これに対し、日常生活のさまざまな場面で、主体と客体の間に「有機的自然の限界からの解放」（ヴェルナー・ゾンバルト）を招く各種の「近代技術」が介入すると、そうした主客の自然な心身的相互交流は現実的に阻害され、主体の「感覚比率」（マーシャル・マクルーハン）は捨象的に変更され始める。その結果、「近代技術的環境」では、主体にはアウラ的関係が十全に成立していない「脱アウラ的関係」による「脱アウラ的知覚」が発生することになる。

そして、そうしたアウラ的知覚の衰退につれて、徐々に絵画においては、従来の主流であったルネサンス的リアリズムは妥当性を喪失し、新たに動態的・間接的・二次元的・抽象的な近代技術的環境に象徴的に適応する抽象造形が勃興することになる。すなわち、「アウラの凋落」（ヴァルター・ベンヤミン）と近代西洋美術における抽象化傾向は、同時代的な並行現象である。

■抽象絵画と近代技術――こころの未来研究の一事例として

上記の過程は、「ヴァルター・ベンヤミンの『アウラ』概念・『アウラの凋落』概念について」「近代絵画と近代技術」「印象派と大都市群集」「セザンヌと蒸気鉄道」「フォーヴィスムと自動車」「近代絵画と飛行機」「『象徴形式』としてのキュビスム」「近代絵画と近代照明」「近代絵画と写真」「抽象絵画と近代技術」等として主題化できる。

本研究プロジェクトは、2010年から2012年にかけて、これらの個別主題に関して、口頭発表を14件（学会12件、研究会２件）行い、論文発表を学会誌等で14件（査読有り10件、査読無し４件）行った。なお、その内の１件（秋丸知貴「近代絵画と近代技術 ―― 近代技術的環境における心性の変容の図像解釈学的研究」『形の科学会誌』第25巻第２号、2010年）により、2011年度形の科学会奨励賞を受賞した。そして、本研究プロジェクトの一部『ポール・セザンヌと蒸気鉄道』により、京都造形芸術大学大学院より2011年度博士学位（学術）を授与された。